

2013. 3 Vol.10

岐阜県現代陶芸美術館
Museum of Modern Ceramic Art, Gifu

CERA・PA セラ・パ

〒507-0801 岐阜県多治見市東町 4-2-5
tel.0572-28-3100 fax.0572-28-3101
<http://www.cpm-gifu.jp/museum>



開館10年をすぎて

陶芸の魅力×アートのドキドキ

MINO CERAMICS NOW 2012 MINO陶芸の気鋭

こどもも楽しめる美術館に

ぎふ清流国体・岐阜清流大会開催記念特別展
岐阜県ゆかりの人間国宝 一美濃陶芸の系譜—

マイセン

● エッセイ

● 次回開催

● 企画展報告

● 教育普及活動報告

● ギャラリーⅡより

● 収蔵品紹介

ピーター・ヴォーコス
《歩く女》 1956年
岐阜県現代陶芸美術館

開館10年をすぎて

岐阜県現代陶芸美術館は、2002年に開館した。開館記念展として、3つの展覧会を展開した。最初の展覧会は、「現代陶芸の100年」と題して、「日本陶芸の展開」展を開催した。この展覧会の章立てを記しておこう。

第1幕	現代やきもの史
	至芸の明治陶芸
	陶芸作家の誕生
	民芸ムーブメント
	茶陶の近代
	新しい陶芸を求めて
	用を離れて
第2幕	陶芸の現在地点
	可能性を求めて
	身のまわりの個人主義
	伝統からの創造
つぎの展覧会は、	「現代陶芸の100年」の「世界の陶芸」展である。この展覧会も章立てを記しておく。
器の美を求めて	The Vessel Beautiful
変貌する器	Transfiguration of the Vessel
物語る造形	Ceramic Narratives
林立する造形	Towering Forms
年度は替わるが、開館記念展の最後は、	「ロシア・アヴァンギャルドの陶芸」展である。

「日本陶芸の展開」展は、作家性に焦点を当てた展覧会である。そのため、明治以降の基本的な展開をとらえることに主眼がおかれており、当館としての独自性は少ないが、「身のまわりの個人主義」などに、当館の目指す作家の実用陶器へのまなざしなどが現れている。当館の作品収集は、名品・逸品主義だけでなく、実用陶磁器、量産陶磁器も積極的にその対象としていくという姿勢が基本であり、現在、収蔵作品は1,522点である。この数字はいわゆる常設展の維持には、いまだ十分とはいえない。私の個人的な感想であるが、明治から昭和までの日本陶磁史を語るために現在収蔵できているのは、目標の2分の1にも達していない状態であり、これを海外の陶芸に目を移し、アール・ヌーボー以降の展開を概観するためには、5分の1にも達していない状況である。

さて、「世界の陶芸」展であるが、本来とらえがたいものをとらえようとしているため、抽象的なことばで章立てを構成せざるをえなかったが、なかでも、本展を担当した学芸員がこだわった、「物語る造形・ナラティブなやきもの」という章をもうけたことは、先見性を秘めたもので、10年たってみると、この章のような作品が、少しずつ増えているような感じがする。今後の方向性のひとつとして、これからも注目していく必要がある。

「ロシア・アヴァンギャルド」展は、サブタイトルである、「モダンデザインの実験」にもあるように、当館がデザイン的なものを重視するという姿勢を示すために開催した。とくに力を注

いだのは、展覧会の特別展示である「ロドチェンコ・ルーム・プロジェクト」であった。このプロジェクトは、当館が入るセラミックパークという施設が、東濃の陶磁器産業振興として建設されるために、準備室が、現在の商工労働部に設置されたため、岐阜県の代表的な産業である、東濃の陶磁器、岐阜の繊維、飛騨の木工のそれぞれの産業と力を合わせ、ロドチェンコがデザインした、陶磁器、衣服、家具を復元するというものであった。監修にロドチェンコの孫であるアレキサンドル・ラヴレンチェフをむかえ、それぞれの専門家からの指導を受けて完成させたものである。幸いにも、このプロジェクトを含め、展覧会そのものが、グッドデザイン賞の特別賞を受賞することができた。

このようにスタートした当館は、展覧会の軸になる個人展で取り上げた作家は、この10年で、順不同に、八木一夫、富本憲吉、岡部嶺男、加守田章二、河井寛次郎、小山富士夫、加藤卓男、金子潤、川喜田半泥子、エミール・ガレ、カルロ・ザウリなどであり、陶磁器では個人名とならぶ窯名では、マイセン、ウェッジウッド、ロイヤル コペンハーゲン、ビング オー グレンダール、オールドノリタケ、景德鎮などである。また、韓国・台湾・日本の3カ国の交流展や、規模は小さいが、郷土の作家展で、鈴木藏、加藤孝造を取り上げ、今年はこのシリーズで、伊藤慶二を取り上げる予定である。当館の10年を振り返るために、開館記念展から話を始め、美術館としての方向性を示してきた。

当館が入るセラミックパークは、陶磁器産業としての美濃焼のさらなる発展を目指して、3年おきに開催する国際陶磁器フェスティバル美濃のメイン会場として建設されており、フェスティバルの運営は、別な機関があたるが、当館もフェスティバルおよび、地場産業としての美濃焼とも密接な関係を持ちつつ、新たな展開を模索しているところである。そして、それだけではなく、日々進化し、その表現領域を拡大しつつある陶磁器制作の現場を重視し、海外との交流を活発化しつつ、つぎなる10年に進んでいくことになろう。

(館長 榎本 徹)



ロドチェンコ・ルーム・プロジェクト展示風景

陶芸の魅力×アートのドキドキ

2013年5月25日(土)～8月25日(日)

この展覧会は、画家や彫刻家らが土に魅せられて挑戦した陶芸作品を、滋賀県立陶芸の森で制作された作品から紹介するとともに、他分野の美術と関連しながら成熟してきた現代陶芸の一断面を、陶芸の森及び当館の収蔵品を中心に紹介する特別展です。

日本と欧米の陶芸が、1950年代半ばというほぼ同時期に、それぞれ大きな変革の時を迎えたことについては、これまでたびたび言及されてきました。その要因の一つとして、画家や彫刻家等、他の素材を用いるアーティストたちが陶芸と関わりをもつようになったことが挙げられるでしょう。それほど知られていないかもしれませんが、マルク・シャガールやゴッギャンなど、著名な画家たちの中にも陶芸を経験した作家が少なくありません。中でも、パブロ・ピカソやジョアン・ミロは1940年代に陶芸を始め、戦後の各地の革新的な陶芸の発生に大きな影響を与えました。一方で、他分野の動向を見据えていた陶芸家たちの存在がありました。ジャクソン・ポロックなどの抽象表現主義の画家たちと出会ったピーター・ヴォーコス、「ピカソやクレーの近代絵画と渋い日本のロクロの味」を調和させようとした八木一夫、ルーチョ・フォンタナなどのアンフォルメル作家たちに触発されたカルロ・ザウリなど、いずれも画期を築く表現に至るきっかけに、同時代の「美術」への眼差しがあったのです。

陶芸という分野は、自己表現に至る以前に特殊な技術や複雑な工程の習得が求められます。こうした高い専門性に臆せず、新たな発想で取り組む他分野の作家が、時として極めて興味深い優れた作品を残す。そればかりでなく、陶芸家の視野を広げ、陶芸の流れを変える程の影響を及ぼすこともあると言えるのではないのでしょうか。

近年、日本においても、油彩を専門とする画家たちやFRPや木材を扱う彫刻家たちが、陶芸に挑戦するという事例が多くみられるようになりました。滋賀県に所在する有数の窯業地、信楽に設立された滋賀県立陶芸の森は、こうした様々な分野の作家たちが陶芸制作に取り組む舞台にもなってきました。これらの作家たちは、彼らなりに陶芸という素材、技術を解釈し、陶芸家とは異なる大胆な切り口で表現してみせます。個々の作家たちが、自分たちの感じた陶芸の魅力を発信すべく、自分なりの方法で作上げた作品を紹介することで、一般の鑑賞者ばかりでなく、作り手をもドキドキさせ、陶芸の未来に向けた刺激になることを願う。そんな、「陶芸」への応援歌ともいえる展覧会を当館でも開催します。会期中には、第30回幻聴音楽会「陶芸の音楽」をはじめとする関連企画を実施し、様々な角度から陶芸の魅力に迫ってまいります。

(学芸員 村山 閑)

■主 催	岐阜県現代陶芸美術館
■共 催	中日新聞社
■企画協力	滋賀県立陶芸の森
■後 援	多治見市
■会 期	平成25年5月25日(土)～8月25日(日)
■休 館 日	月曜日(月曜が休日の場合は翌平日)
■会 場	岐阜県現代陶芸美術館 ギャラリーI
■開館時間	午前10時～午後6時(入館は午後5時30分まで)
■観 覧 料	一般800円(700円)、学生600円(500円) ※高校生以下無料 ()内20名以上団体



奈良美智《White Riot》
2010年 ©Yoshitomo Nara
Photo: Keizo Kioku



八木一夫《曲》
1964年 岐阜県現代陶芸美術館



カルロ・ザウリ《白い官能》
1976年 岐阜県現代陶芸美術館

MINO CERAMICS NOW 2012 MINO陶芸の気鋭

2012年9月1日(土)～11月11日(日)

岐阜県下で活躍、

93名の作家、陶磁器デザイナー作品の競演

岐阜県現代陶芸美術館は、MINO CERAMICS NOW 2012 会期中の10月12日に開館10周年を迎えました。この間、当館の活動方針に沿って、国内外の近現代を代表する陶芸家や海外の名窯など、陶磁器に関わる様々な展覧会を開催してまいりました。そして、10年の節目を迎えるに当たり、あらためて当館が所在する美濃の陶芸と真摯に向き合い、深く見つめるべく企画したのがこの展覧会です。

実は、本展については初めての企画ではなく、2004年に開催された展覧会の第2弾となるものです。先回は、1300年の歴史を辿った美濃焼の産地を背景に、荒川豊蔵や五代加藤幸兵衛といった美濃陶芸の先人から、近年の国際陶磁器フェスティバル美濃で受賞を果たした若手の陶芸家まで120名の作家を包括的に展示するものでした。そして、「美濃陶芸の先駆者たち」「美濃焼復興」「古典から造形へ」「オブジェとクラフト」「公募展とニューウェーブ」といった5部構成によって紹介をいたしました。

また、展覧会名となっているMINO CERAMICS NOWについては、「美濃」と表記せずに、あえて「MINO」とすることで、

従来認識されている美濃焼の産地を意味するのではなく、これからのMINOを示していくという意思を表しており、この考えは前回展を踏襲しています。さらに、開催年を記載しているのは、今後の継続した開催を通じて、その時々々のMINOを追いかけていきたいとの思いが込められています。

一方で、今回の展覧会は前回とは一線を画して、特に、次代のMINOを担い、切り開いていく若手の作家たちに焦点を当てるものとなりました。というのも、前回展以降の8年間をみただけでも若手の登場は実に際立っており、このことによって産地には常に新しい風が送り込まれ、多彩な様相を呈しながら変化し続けているからです。かかる状況は、国内の他産地と比較しても極めて顕著であり、この地域における特筆すべきものといっていでしょう。これにより、MINO陶芸の現況のみならず、近未来の一端を示すことができたと考えております。

出品については、活躍目覚ましい若手の陶芸作家はもちろんのこと、陶磁器メーカーで実直に成果をあげているプロダクトのデザイナーなど各方面に幅広く、できるだけ多くに依頼いたしました。また、前回展の開催以降に転居し、引き続き新天地で活躍を続けている作家についても声をかけ、20代から50歳までのあわせて93名という多くの方々に参加いただいております。この結果、産地に根差した作家と、県外から多治見市陶磁器意匠研究所や岐阜県立多治見工業高等学校専攻科を経て活動

している作家、伝統からオブジェ、プロダクトまでさまざまなジャンル、そして多彩な技術・技法が一堂に会するものとなりました。まさに、パワフルで奥深く、大いなる可能性を秘めたMINO陶芸が会場に投影されたものになったと思います。

会期中は4,748名の方々にご覧いただきました。また、出品者の加藤委氏、小塩薫氏、安藤工氏、加藤智也氏、川端健太郎氏、新里明士氏らによる、アーティスト・トークリレー、および、渡部誠一副館長による文化の日スペシャル・ギャラリートークリレーを開催いたしました。さらに、当館では初めてとなるTwitterによって、上記催しや出品作品に関する情報を逐次発信しました。

なお、本展の会期中にギャラリーⅡでは、「岐阜県ゆかりの人間国宝―美濃陶芸の系譜―」が同時開催されており、MINO陶芸の違った一面に触れることができるものとなっていました。本事業は、ぎふ清流国体、ぎふ清流大会文化プログラム事業として開催され、会期中には彬子女王殿下にご高覧いただきました。

(学芸員 立花 昭)

■会 期	平成24年9月1日(土)～平成24年11月11日(日)
■会 場	岐阜県現代陶芸美術館 ギャラリーⅠ
■開館時間	午前10時～午後6時(入館は午後5時30分まで)
■主 催	岐阜県現代陶芸美術館
■共 催	中日新聞社
■観 覧 料	一般500円(450円)、大学生400円(350円) 高校生以下無料 ※()内は20名以上団体料金 ※11月3日(土)文化の日は全館無料開放
■関連催事	アーティスト・トークリレー 9月22日(土・祝) 13:30- 文化の日スペシャル・ギャラリートークリレー 11月3日(土) PartⅠ：岐阜県ゆかりの人間国宝〔同時開催展〕 13:30-14:30 講師／榎本徹館長 会場／ギャラリーⅡ PartⅡ：MINO CERAMICS NOW 2012 15:00-16:00 講師／渡部誠一副館長 会場／ギャラリーⅠ



加藤委《サンカクノココロ》2012



林恭助《曜変埴》2012



鈴木徹《緑釉花器》2012



若尾経《青瓷俎皿》2012



伊藤秀人《練彩大鉢》2012



柴田正太郎《Suuun》2012



大江憲一《しょうゆざし》2012



安藤工《悠久》2011



小塩薫《銀のリボンの靴と光のBag》2012



林茂樹《OO-VII》2012



新里明士《ラク碗》2012



加藤亮太郎《練上志野茶盤 銘葉隠》2012



川端健太郎《Batista》2012



青木良太《LUXURY》2011



武村和紀《迷》2011

加藤智也
《Topological Formation》2012

美術館を親子で鑑賞や作陶を楽しめる身近な場所にしたいと願
い、今年度はこどもワークショップと親子鑑賞会に力を入れました。

こどもワークショップ

ものがあふれている現代だからこそ、作陶体験を通して、手づ
くりのよさを実感し、ものを大切に作る心を子どもたちにもってほしい
と考えます。また、手づくり茶わんで食事を取ることで、家族との
会話が増え、食事の楽しさが倍增することを願って、こどもワーク
ショップを7回実施しました。

みて・つくって・つかって楽しもう

展示会をみて楽しみ、ちゃわんやおさらをつくって楽しみ、自分
がつくった陶器をつかって楽しんでいただこうという企画です。展
示作品を興味深く見る姿や初めてのろくろ体験に一生懸命な姿な
ど、普段見られないお子さんの様子を親御さんはあたたかいまな
ざしでご覧になっていました。

8月 5日	自分のごはんちゃわんをつくろう
8月12日	ポップなちゃわんをつくろう
9月17日	おじいさん・おばあさんといっしょにつくろう

つかって楽しんでいる写真は、参加されたお客様から募集し、
美術館ロビーにワークショップの様子とともに展示してあります。写
真は、今後も随時新しいものに替えて展示をしていく予定です。ぜ
ひ、ご覧ください。

陶芸作家に学ぼう

東濃で活躍しておられる陶芸作家を講師としてお招きし、さまざ
まな技法を教えていただきました。こつをわかりやすく教えていた
だき、思った以上に簡単に素敵な作品ができたとお客様は満足そ
うでした。

11月 4日	僕の私のおもしろ皿づくり	講師：三尾 忍氏
12月 9日	僕の私のお気に入り絵皿づくり	講師：志水 りえこ氏
2月 17日	動物の人形づくり	講師：河内 啓氏
3月 3日	こいのぼりのプレートづくり	講師：小栗 寿賀子氏

こどもワークショップは、今後も実施します。当館ホームページ
に詳細を掲載し、参加者を募集しますので、多くの方にご参加い
ただきたいと思います。



陶芸作家に学ぼう



陶芸作家に学ぼう

親子鑑賞会

当館スタッフによる展示作品の鑑賞会を親子を対象に行ってい
ます。気に入った作品を選んだり、展示作品にかかわったクイズを
解いたりして、親子で楽しく鑑賞をしていただいています。

参加されたお客様の感想 ・かわいらしい作品ばかりで、娘たちが気に入りました。美術館を 身近に感じて大きくなってほしいので、また来たいです。 ・ただ見るだけでなく、「伝えよう」「覚えよう」「気に入るものを見 つけてみよう」と意識することで、いつもより感性が刺激されてよ かったと思います。 ・小さい子がいると気が引けて、足を踏み入れることができないの ですが、今回はスタッフの方がついてくださり、楽しく鑑賞するこ とができ良かったです。
--

親子鑑賞会は、参加者を随時受け付けております。参加費は
無料です。参加希望の方は、事前に、電話（0572-28-3100）にて、
お申し込みください。詳細は当館ホームページをご覧ください。

「お母さん、今度の休みは、また現代陶芸美術館に行きたいね。」
「うん、そうしよう。」こんな会話が聞こえてくると願って、今後も親
子で楽しめる企画を考えていきます。ぜひ、お気軽に足をお運びく
ださい。

（教育普及担当 有賀雅美）



みて・つくって・つかって楽しもう



みて・つくって・つかって楽しもう



みて・つくって・つかって楽しもう



親子鑑賞会の様子



親子鑑賞会の様子

展示会スケジュール

	2013.4	2013.6	2013.8	2013.10	2013.12	2014.2	2014.4
ギャラリーⅠ	小早川コレクション 麗しのマイセン人形 11月23日—5月6日	陶芸の魅力×アートのドキドキ 5月25日—8月25日		オールド大倉の世界（仮） 9月7日—11月24日	やきものタイムカプセル —呼び覚まされた 多治見工業高等学校秘蔵の陶磁器— 12月7日—2014年2月23日		デミタス コスモス 鈴木康裕・登美子 コレクション 3月8日—6月22日
ギャラリーⅡ	アジア・木と土に見る みんぞくのかたち 1月12日—6月23日	美濃 岐阜県 陶芸展 美術展 7月5日—15日 7月20日—28日		日根野作三と薫陶を受けた7人 伊藤慶二展 8月10日—2014年1月13日		ラテン！（仮） 1月25日—	

ギャラリーⅡより

ぎふ清流国体・岐阜清流大会開催記念特別展

岐阜県ゆかりの人間国宝 ー美濃陶芸の系譜ー

平成24年8月4日（土）～12月24日（月・休）

本展示会では、陶芸の分野で国指定の岐阜県にゆかりのあ
る重要無形文化財保持者、いわゆる人間国宝（荒川豊藏、加
藤土師萌、塚本快示、鈴木藏、加藤卓男、加藤孝造）の6名
および岐阜県で指定された重要無形文化財保持者8名（加藤十
右衛門、加藤景秋、林景正、五代加藤幸兵衛、若尾利貞、安
藤日出武、玉置保夫、林正太郎）を紹介しました。さらに特別
出品として富本憲吉、小山富士夫の2名も加えての展示となり、
16作家による全69点の作品が会場に並びました。現在活躍さ
れている作家の作品には新作が含まれ、各々の制作への飽くな
き追求の精神も感じられる内容となりました。そして「志野」（荒
川豊藏、鈴木藏）や「瀬戸黒」（荒川豊藏、加藤孝造）といっ
た美濃桃山陶に代表されるような技術の指定だけではなく、「色
絵磁器」（加藤土師萌）、「青白磁・白磁」（塚本快示）、「三彩」（加
藤卓男）などの幅広い技術での人間国宝を育ててきた美濃焼の
地の多彩さがあらわれた展示になったと思います。

そもそもは昨年岐阜県で開催された国体にあわせ企画された
展示会ということもあり、会期中には岐阜県博物館（関市）で
も特別展「岐阜、染と織の匠たち 人間国宝三人展」が催され、
岐阜県の2施設で県ゆかりの人間国宝を紹介し、国体を機に訪
れる県内外の多くの人にご覧いただくといういうねらいがあり
ました。このような開催経緯はあるものの、実は昨年秋に開
館10周年を迎えた当館において、これまでに企画展等でこれら
美濃の人間国宝を個別にとりあげたり、美濃の人間国宝として
テーマ展示等で紹介することはあっても、国、県指定の重要無
形文化財の保持者をまとめて紹介する展示は今回が初めてでし
た。また当館のもう一つのギャラリーで開催された「ミノセラミッ

クスナウ2012」の会期と重なる時期があり、あわせて鑑賞すると、
人間国宝から20代の若手作家まで美濃陶芸の姿を見通してい
ただくことができたと思います。

様々なかたちで過去にも紹介されてきたであろうはずながら、
岐阜県の人間国宝と県指定の重要無形文化財保持者がまとま
った図録というのはほぼ見当たらず、ましてや陶芸分野での国、
県指定の重要無形文化財保持者の指定が続いた近年の状況を
反映したものはまだなかったことから、展示会後にも美濃のこう
した保持者たちをまとめて紹介できる資料的価値のある図録を、
という目的から図録も発行しました。現在もミュージアムショッ
プで販売していますので、機会があればぜひご覧ください。

（学芸員 佐野素子）



マイセン

花飾ポプリ壺「科学」

マイセン磁器製作所 1895年頃

ドイツのマイセン磁器製作所により、1900年前後に製作されたポプリ壺である。彫像が付いた蓋と、壺という二つのパーツからなり、高さは142cmに達する。神秘的な雰囲気を湛える彫像や、壺を彩る花や鳥などの装飾に目を奪われるが、この壺を眼前にした時、産業としての磁器生産が既に開始されていた時代に、これだけ大きく華やかな壺が、どのような目的で製作されたのであろうか、という疑問が沸いてくる。

この疑問を解くためのキーワードは、“万国博覧会”である。19世紀後半より世界各地で開催された万国博覧会は、各国が最新の技術や、高い芸術性を披露する場であったため、そこに展示された作品により、その時代の雰囲気を窺い知ることができる。この壺が製作されたのと同時期に開催された、1900年パリ万国博覧会の会場には、本作と同型の壺で、現在マイセン美術館に収蔵されている、『花飾ポプリ壺「フローラ」』が対で飾られ、圧倒的な存在感を放っていた。つまり、この壺が製作された背景として、万国博覧会や大規模な貿易見本市などにおける、目玉作品としての役割があったものと思われる。

また壺と同様に、デコラティブなシャンデリアや彫像作品が、万博におけるマイセンの展示会場を占めていることから、当時このような華やかで古典的なスタイルの需要が高かったことが窺える。1900年のパリ万国博覧会では、アール・ヌーヴォー様式が絶頂を迎え、陶磁器部門でも、ロイヤル コペンハーゲンなどに代表される、シンプルな形態に多色の釉下彩を施した作品が注目を集めたが、その一方で、古典様式を基調とした作品が人気を博し、振興ブルジョワジーなどに好まれたとされる。つまり、『花飾ポプリ壺「科学」』は、時代の要求により誕生した作品であると言える。

本作品は、上部の彫像と下部の壺が、異なる原型制作師によって作られた。まず彫像であるが、これは1895年に当時の原型制作部門

長であった、エマーリッヒ・アンドレイズンによって制作された。ギリシャ風の衣装を身に纏った女性は、左手に本を持ち、右手に松明を握っている。彼女が左肘を置いているのは、天球儀であり、その下にはいくつもの本が積み重なっている。また足元にも本が置かれ、その上には

は一羽の梟が鎮座している。作品を構成するこれらの要素から、この人物はギリシャ神話に登場する女神ミネルヴァを表していると考えられるが、この時代にギリシャ風の女性像が流行したという事実も、考慮する必要があるだろう。

一方壺は、マイセンの黄金期を築き上げた、原型制作師のヨハン・ヨアヒム・ケンドラーによって1760年頃に制作されたものを、エルンスト・アウグスト・ロイテリッツが1877年にアレンジをしたものである。ロイテリッツは、19世紀後半のマイセン磁器製作所を支えた人物で、ケンドラーらが活躍した18世紀のスタイルを復刻させるとともに、そこに時代の趣向を加味した作品を多く手掛けた。

マイセンを代表する立体的な装飾技法の一つ、貼花装飾により、色鮮やかな花、鳥、虫が生き生きと表現されている。そして、それらに囲まれるように中央には、華やかな絵付けが施されている。開窯当初マイセンは、東洋風の絵付けを行っていたが、西洋風の絵付けへと移行した時代に参考とされたのが、フランスのロココ様式を代表する画家たちの銅版画であった。とくにアントワヌ・ヴァトーの雅宴画は模範とされ、本作品でも屋外にて集う男女の姿が描写されている。

伝統的なマイセン磁器の特徴を網羅しつつ、世紀の変わり目に当たる、この時代の雰囲気を存分に伝える作例である。

(学芸員 山口敦子)

岐阜県現代陶芸美術館は、本作品を含む、およそ100点のマイセン人形を中心とする磁器コレクションを、2012年に小早川春信氏より受贈いたしました。

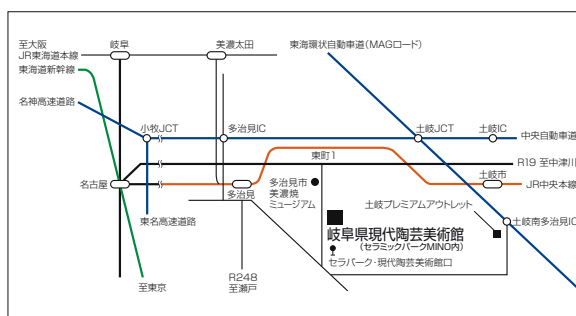


岐阜県現代陶芸美術館 Museum of Modern Ceramic Art, Gifu

〒507-0801 岐阜県多治見市東町4-2-5
TEL 0572-28-3100 FAX 0572-28-3101
URL <http://www.cpm-gifu.jp/museum/>

開館時間

午前10:00～午後6:00 (入館は午後5:30まで)



電車でのアクセス

東京・大阪方面→名古屋駅でJR中央線に乗り換え
JR中央線多治見駅からは
・タクシー 所要時間約10分
・多治見市コミュニティバス オリベール
所要時間約25分「セラミックパークMINO」下車(土・日・祝)
・東鉄バス「瑞浪駅前」行き、「妻木」行き
「セラパーク・現代陶芸美術館」下車 徒歩約10分

お車でアクセス(駐車場無料 一般車312台収容)

・東名高速道路・名神高速道路
→小牧IC経由で中央自動車道へ
中央自動車道多治見ICから国道19号を土岐・中津川
方面に約5km、東町1の交差点を右折
・東海環状自動車道土岐南多治見ICから約5分